

# 平成24年度シティプロモーション推進 基本方針

## 背景

東広島市は、都市イメージを向上させて定住人口・交流人口の増大、企業誘致の促進等を図るためにシティプロモーションに取り組むこととし、平成22年度にシティプロモーション推進戦略プランを策定しました。

本プランでは東広島市のイメージを向上させて、東広島ブランドを構築するには、「他の都市との違い・優位性」を打ち出していく必要があると考え、他の地域に比べて大きな優位性のある「産学官連携」、「高い教育力」を背景に、「知」、「知恵と工夫」をキーワードにした戦略を展開することとしました。東広島ブランドのブランドメッセージは「くふうに満ちてる東広島」。市民が「知」を大切にしながら、「工夫」していくことで、東広島市の未来を切り拓いていくことを基本理念としています。

平成24年度は「くふう」という言葉の背景にあるストーリーまでをPRしていき、東広島市のブランドの核をしっかりと根付かせる事業展開が不可欠だと考え、以下を平成24年度シティプロモーション推進の基本方針とします。

## 基本方針

1. 「くふう」とは何か、なぜ東広島市が「くふう」なのかを掘り下げて伝えます。
2. 多くの市民の「くふう」に対する共感を高めます。
3. 「くふう」で子どもの未来を切り拓くイメージを構築します。
4. 定住人口の増大のための施策を実施します。
5. 企業誘致、観光客誘致、特産品販売促進を図ります。



## 平成24年度重点事業戦略

「くふうに満ちてる東広島だからこそ、子どもを育てるのに適している」という、

## 『子どもを育てるなら東広島』のイメージ獲得

子どもたちの持つ無限の可能性を信じ、くふうをベースとした「柔軟な発想」や、「ひたむきさ」、「素直な心」を大切に育てていくまちであることを前面にアピールし、そこから「子どもを育てるなら東広島」という都市イメージを構築していきます。

## 事業展開

都市ブランドを構築(都市イメージを向上)するために、「子ども未来プロモーション」、「くふう再認識キャンペーン」を実施するとともに、成果を促す施策として「定住促進策」を実施します。また、担当課が実施する企業誘致、観光客誘致、特産品販売促進施策と連携します。それらの情報をメディア(マス・ソーシャル)、PR大使等を通じて全国に情報発信していきます。

「どこに行っても

楽しみを発見する。

それが僕のくふうかな」。

科学界のインディジョーンズ  
広島大学 准教授 長沼毅

「学問は、最高の遊びである」。

この広島大学のキャッチフレーズを体現している学者がいる。それが長沼毅准教授である。彼は、生命の起源を追い求め、微生物を発見するために辺境の地を駆け巡っていく。「科学界のインディ・ジョーンズとか帝王とか、いろんなニックネームが付いているんだ。たぶん変な学者と思われるているんじゃないかな」。

先生はユニークですねと言つと、「ユニークはそれで終わる。僕はオリジナルを目指したいんだ。オリジナルは後に続く者がいるっていいんだよ」。

火山では、お湯が湧き出るところを見つければ温泉気分。ラクダに乗るためのトレーニングを重ねて、サハラ砂漠を堪能する。南極では、湖にもぐる時のウェアをシヨックキングペンクで見事に決め、北極圏では、世界最北端のビール工場を見つけ喜ぶ。

いかに楽しむか。それは、過酷なフィールドワークに臨むストレッチのようなものかもしれない。

「星をよよく見るんだけど。流れ星を見つければ、一点に力を入れないで、ぼよっど見ることもいい。力を使わないで見ることもいい。力が抜けること、常に力を抜くことを考えているとか。最大限の力を引き出すための脱力。学者にとって努力すること、は当たり前だからね」とアスリート精神を持つ学者は、言った。

ノンフィクション、東広島。





PROFILE  
**長沼 毅**  
 NAGANUMA TAKESHI  
 1961年生まれ。広島大学大学院生物園科学研究科准教授。1989年、筑波大学大学院生物科学研究科博士課程終了。海洋科学技術センター（現・独立行政法人海洋研究開発機構）、カリフォルニア大学サンタバーバラ校海洋科学研究所客員研究員等を経て現職。



その土地ですべてが完結できたのが最高。東広島は、そういうまち。

18年前、広島大学に赴任した時、なんて赤茶けた土地なんだろうって思った。深海へ潜り、謎の生物を研究していた長沼先生の次のテーマが、目の前に広がっていた。

それがフード（風土・FOOD）サイエンス。赤は鉄分の色。おいしい牡蠣ができるのも、この赤い土があればこそ。鉄分を含んだ森の腐葉土が多く、川に流れ、川から瀬戸内海に運ばれていく。この自然のメカニズムが牡蠣を育てている。

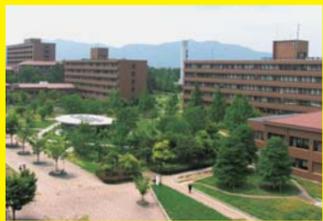
「鉄分を川底に沈殿させないで海に運ぶには、腐葉土に含まれるフルボ酸の力が必要なんだ。福富町のフナの原生林なんていいよね。森を育てることは海のためでもあるんだよ」。そのフルボ酸以上に適しているのがレモンに含まれているクエン酸。

鉄ありレモンありの東広島は、本当に最高の条件が揃った土地といえる。「鉄の面白さに目覚めて、いつか鉄をつくりたいなあ」と思った。それが実現したのが4年前。もちろん日本古来のたたら製鉄だ。中国山地はたたら発祥の地。賀茂台地にもたたら跡が残っている。たたらは、元々鉄をつくる時に送る風をおこす「かまど」のたたら。

研究は足で稼ぐをモットーにしている長沼先生は、ついにたたら集団を束ね、中国山地の山々で鉄をつくり始めたのである。「だって自分が知らないのに、教えることはできないじゃないか」と言っていた。鉄の次は、米。田を一反ほど借りて農作業。できた米を地元の蔵元へ持っていき、酒まで作ってもらったという。全部で日本酒が約100升。「炎と酒の夢日記」というブログを書くほど酒好きの先生にとって、それはきつと至福のプロセスだったに違いない。

徹底した現場主義。深海に潜り、海底火山の調査をしたり、鉱山の地下に実験室をつくったりと冒険者のような日常だが、いとも戻るといっては、東広島である。

「自分で歩いてみて、賀茂台地が広島県の川の源流であることがわかった。まさに山河森海（さんがしんかい）を体感できる地。この財産をいつまでも大切にしたい」。生物学者として、そしてこの地で暮らす住人としての言葉は、とても真摯で力強かった。



学園都市東広島市の中核を成す広島大学。市内に緑豊かな252ヘクタールの東広島キャンパスを抱え、広島市内などのキャンパスを含め、11学部、12研究科、1研究院、1附置研究所、大学院並びに11もの附属学校園を有している。産学官連携や国際交流も活発で、地域に開かれた大学として、知の拠点となっている。  
 ※P01～02の写真は、東広島市西条町にある広島大学宇宙科学センター附属東広島天文台。  
 広島大学  
 東広島市鏡山一丁目3番2号  
 URL/http://www.hiroshima-u.ac.jp/